

イメージ考ノート

関根秀和

1

カイヨワは、不変で客観的で動かすことのできない秩序が現象を支配しているという理解に到達した文化だけが、これと均衡をとるかのように、現実の完全な規則正しさをまさに否認することに喜びを見いだす特異な形の「想像」を生み出すという。¹⁾ カイヨワにとって、幻想的小説はこの種の想像の産物である。彼はこのジャンルの小説を克明に渉猟して、無邪気な妖精物語とはことなる幻想的小説の現代における位置づけをあきらかにする。彼によれば幻想的小説の恐怖は、科学的な確実性で非常に頑丈に編まれ、あり得ないことの襲撃を許すことがあるとは決してみえない網目の中に、おもいもかけずできたかき裂きである。²⁾ 彼は幻想小説を生む作家の「想像」を、個人の所有に帰さないで、一種の閉塞状況に到達したという認識が成立するときに、文化としての「幻想小説」が生まれるという、いわば社会的所有の過程にこれを位置づけとらえようとしている。カイヨワはこの議論のなかで、「現象を支配する秩序の理解」を自然科学に由来するものと社会科学に由来するものに整理しているわけではなく、むしろどちらかといえばやや散文風に一種の閉塞状況としてとらえているのだが、それでもなお、彼が指摘する、「閉塞状況」とそれと均衡をとるかのごとき特異な形の「想像」とのコントラストは、現代社会における人間の状況や社会変動を考察するうえで重要な示唆である。

1) Roger Caillois *Obligues Précédé de Images images*… Editions Stock, 1975
塚崎幹夫訳『イメージと人間』思索社 1978. p. 22

2) 塚崎, 前掲書 p. 31

現代社会における人間の状況を閉塞状況として、ないしはそれに近いものとしてとらえようとするところみはけっして少くない。たとえば、60年代の終りに紹介されたマルクーゼの「抑圧的寛容」は、あらゆる社会的な衝撃を吸収し、相対化し、埋没させてしまう「柔構造社会」の閉塞状況をセンセーショナルに表現することにもっとも成功したものだ。またほぼ同じ頃に提出された「対抗文化」も、主として若いゼネレーションの行動が彼らを閉塞させてしまいかねない社会への拒否であり、部分的ないわゆる逸脱ではなくて、社会全体を拒否する包括的な価値や意識の体系を形成する可能性をもった、そういう意味でいわばもうひとつの「文化」であることを明らかにしようとする試みである。70年代のはじめに紹介されたローザックもその代表的なひとりであるが、彼は閉塞状況を生み出す根源をテクノクラシーの進行にもとめようとする。ローザックにとってテクノクラシーはたんなる権力構造ではない。それは壮大な文化的命令であり、一般大衆が是認している神秘的気分の表現であって、したがってそれは、莫大な量の不満と動揺を、しばしばそれらが、奇行や常規逸脱程度のものに見えている間に、吸いとってしまう大きなスポンジである。³⁾ つまりローザックのばあい閉塞状況は、権力と反権力の葛藤からはなれた、もっと巨大で複雑で不透明な社会システムとの関連で考察されていく。

もちろん社会学は、これらのいわば告発に無関心であったわけではけっしてない。むしろ60年代の終りから70年代初めにかけて告発の嵐がつのるまえから、いくつかの事実を発見し、現代社会における人間の状況を理解するための理論的枠組を提出してきた。ふりかえてみると、社会学におけるこの種の作業は、主として、現代の社会を組織の論理と人間（主体）の論理との乖離という視点を介してとらえようと努めてきたといえる。たとえば集団の噴出、組

3) Theodore Roszak, *The Making of a Counter Culture*, 1969 稲見他訳『対抗文化の思想』ダイヤモンド社 1972. p. 10

織の巨大化、複雑化などの傾向に比例してつよまる管理機能と人間との動態を、脱出と回帰という流れのなかに位置づける試みのなかで大衆社会論は展開された。リースマンの「敵対的協力」⁴⁾も過剰同調のなかでしか生きることのできない現代人（大衆社会）のいわば閉塞状況を明らかにしようとしたものである。

3

かつて、ダニエル・ベルは、社会の論理と人間（主体）の論理の乖離を、むしろ「資本主義の文化的矛盾」つまり技術＝効率と文化＝自己実現との乖離として捕捉した。主体の側に加えられるさまざまな拘束を分析するところみは、いまではさらに多角的である。両者の乖離を主体の欲求水準の生産水準への適合化としてとらえる欲求論の展開もさらに新たな段階に入ろうとしているし、主体を支える意識や社会制度の意味づけの変化、それに個人（主体）に自己実現をうながすはずの価値の体系の風化と崩壊を、いわば「意味の共同体」の喪失という視点からとらえようとするところみもすくなくない。

しかし、これらのすくなからぬ努力のつきかさねにもかかわらず、社会学がいまだに現代社会における人間の状況を有為にとらえ得ていないという批判は多い。ターナーによれば現代社会学の主要理論は、機能主義、闘争論、相互作用モデル、交換論そしてエスノメソドロジーである。⁵⁾ エスノメソドロジーは、ミルズたちの機能主義批判以後における最もラディカルな新鮮な問題提起として登場してきた。他方ではまたブラムソンやニスベット以来、「社会学の社会学」の提唱もさかんである。

外からの批判と内からの反省を契機とするこれらの傾向は、60年代以後の社会の激変とそこに発生する諸問題の尖鋭化が、社会学にいかに多くの新しい問

4) David Riesman, *The Lonely Crowd*, 1961 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房 1964, p. 72

5) J.H. Turner, *Structure of Sociological Theory*, 1974

題を提出したかをものがたっているともいえるし、また現実の社会とのギャップを前にした既存の社会学の動揺のなかからのレスポンスだと考えることもできる。社会学は弁証法的性格をもち、抑圧的次元と解放的次元とをふくんでいて、その解放的潜勢力をいかに発展させるかが、現代社会学の課題であるとグールドナーは云う。⁶⁾ 無限の自己変革を土台にした彼の「自己反省の社会学」の構想についての評価はしばらくおくとして、今日、社会学がおうている責任の重さにたいするグールドナーの真摯な姿勢にわれわれは多くを学ばねばならない。

4

53年10月に開催された、第51回日本社会学大会のあるセッションで、「神経過敏」社会（ナーバス・ソサエティ）の病理と題する報告がおこなわれた。報告の主たる内容が、昭和30年以後の経済成長とそれがもたらした社会構造の変化のマクロな記述にとどまったために、おそらくは、報告者の意図に反して、「神経過敏」社会という概念が、分析用具として用意されたのか、また記述概念として提出されたのかふたしかなところがあって、反響はあまりでなかった。しかし、レジメによれば、報告者は、高度成長以降における神経性疾患それも心身症の激増に注目していて、適応不良の集約的形態として心身症などの神経性疾患に注目しながら、ナーバス・ソサエティという語を構想していたようである。

ここで、この報告に言及したのは、報告者の意図を推量するためではなく、「神経過敏」社会（ナーバス・ソサエティ）という新鮮なネーミングに触発されるものがあったからである。それは、はじめにふれたカイヨワの「幻想的小説」＝特異な形の「想像」、からうけたものと性質を同じくしている。

6) A.W. Gouldner, *The Coming Crisis of Western Sociology*, 1970 栗原他訳『社会学の再生を求めて』1. 新曜社 p. 14

イメージ考ノート

報告者はふれていないけれども、心身症は抑圧された存在が、その状況のなかから自己自身に宛てて発する non-verbal な言語である。それはカイヨワの「幻想的小説の恐怖」のように、人々の日常性のなかにかぎ裂のごとくある日突然に出現する。一般的にいて、神経症は、適応に不利な環境条件と、一定の性格傾向とのからみあいによって生ずるとされているが、心身症はそのなかで、いわば body language をとおして自己に語りかけるという、もっともドラマティックな形相をもっている。そして客観的条件としてではなく、あくまでも主体の側から認識されるというその意味でまさに心因的な閉塞状況のなかで、このドラマは誕生し進行する。

もしわれわれが、現代社会における閉塞状況を考察するにあたって、心身症という non-verbal language に相当するような、非言語的な表出のプロセスを、一種の中間領域的な概念としてセットすることができれば、現代社会における人間の状況を今日よりももうすこし深くとらえることができるにちがいない。たとえば、不適応の集約的形態としての心身症の発生をきわめて単純にいわゆる「逸脱」や「対抗文化」とならぶ現象のひとつとして考察するのではなく、「対抗文化」そのものが現代社会の non-verbal な表出であり、その意味でこそまさに現代社会がナーバス・ソサエティであることや、また、社会は、じつは、社会それ自身にむかう信号系を保有しているのだということがあきらかになるかもしれない。

5

ながらく社会学は、社会を、人間相互間の行為や関係のシステムとして把握すること、つまり、社会的相互行為システムとしてとらえることに従事してきた。たとえばパースنزの仕事に代表されるいくつかの作業が、いまわれわれの手にのこされているのだが、これらの作業が、逆に、そういうシステムの枠組をかえたり、新しいシステムをつくりだす作用、いわば変動の解明に、有効

であるかというなお疑問が残る。それでは、そういうシステムの枠組をかえたり、新しいシステムをつくりだす作用はどう構想されるのだろうか。そういう作用を一種の中間領域的な概念たとえば「イメージ」を構想することによって解明できないだろうか。

パースنزは安定した相互行為システムが依拠する条件を、共有文化の媒介、すなわち、文化パタンの内面化であるとする。⁷⁾ 認知的カテゴリー化と表出的シンボルシステムとそれに道徳的規範的システムの、「パースナリティそれ自体の実際の構造への組み込みが」その内容である。フロイドを批判するパースنزのばあい、この内面化のプロセスはフロイドのいうパースナリティ構造の下位システムにまで滲透する。さてわれわれは、パースنزのいうこの内面化のプロセスをそのダイナミクスとしては実際どのように理解したらよいのだろうか。もちろんそれが、非言語的なプロセスを含んでいることはいうをまたないが、内面化は一種の動的なプロセスであって、一定の容器になにかがそそぎこまれるような受身の過程ではない。ましてパースナリティ構造の下位システムにまで内面化が及ぶとすれば、言語的なプロセスをはるかにこえた非言語的なダイナミクスを構想しなければならなくなってくる。

おもいきっていうなら、おそらく内面化は、言語的なプロセスを内包するような、ある象徴空間から他の象徴空間への移動として実現するものとおもわれる。子供のための心理療法の一手段として考案された箱庭療法にユングの分析心理学を導入したカルフは、子供自身の手によってつくられた箱庭が構成している象徴空間が、じつは象徴的体験のプロセスでありまた象徴的表現のプロセスでもあることに注目しながら、その移動によって治療が進んでいくと述べている。⁸⁾ カルフは私にとってきわめて示唆的である。

私は、パースنزの内面化がどちらかというところ、スタティックな、「維持と

7) Talcott Parsuns *Social Structure and Personality*, 1964 武田良三監訳 『社会構造とパースナリティ』新泉社 1975, p. 38

8) 河合隼雄編『箱庭療法入門』誠信書房 1969, p. 15

均衡」の方向で構想されている点を、もっと動的な流動的な方向で補ってみたい。安定した相互行為システムが依拠する条件は彼がいうようにたしかに内面化である。しかし内面化のプロセスが、じつは、象徴的体験が同時にまた象徴的表現であるようなプロセスであるとすれば、内面化は「とりこみ」とか「組みこみ」という一方向にだけ作用する概念としてはもちいることができなくなる。もともと内面化という言葉が方向性をもたされていることを考えあわせると、このダイナミックスを表現する他の言葉を用意する必要が生じてくるわけだ。内面化が象徴的体験と象徴的表現によって実現される象徴空間の移動であるという考えは、かつてユングが提出した心像（image）をおもいおこさせる。ユングはそれを意識と無意識、内界と外界の交錯するところに生じた視覚的な像として捉えた。いまユングのいう「視覚的な像」をせまい意味での造形的な表象にとどめないで、もうすこし拡大した「行動的な表出」にまでおしひろげてみると、一切の社会的行為を再検討するよちがでてくる。ばあいによっては社会的行為そのものを「イメージ」として捉えなおすことに意味をみいだせるかもしれない。

6

すべての社会的行為は象徴空間（イメージ）の移動によって生れ、また移動そのものが行為であるという構想は、次のような、いくつかの可能性を与えることになる。

1. ユングは「われわれの心は、自我を中心として、ある程度の安定性ないし統合性をもっている。しかしながら、その安定性にとどまることなく、その安定を崩してさえ、より高次の統合性へと向かおうとする傾向が、人の心の中にある。個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体へと志向させようとする努力の過程が自己実現ないし個性化の過程であり、これが人生の究極の目的である」と述べている。彼のいうある程度の安定を犠牲

にしても、より高次の統合性へと向かう傾向は、より新たな象徴空間への移動のプロセスである。このよみかえは、たとえば、社会変動のエートスとしてヴェーバーがしばしば注目した「宗教と社会」の考察に、より新しい角度をあたえることになるだろう。つまり宗教が「達人」から「大衆」へ、とりこまれていく方向だけでとらえられるのではなく、宗教それじたいが、人々のより高次の象徴的体験であり表出であると考えられる角度である。こういう角度からの「神」の概念への接近は、たとえば社会変動や世俗化を新しくとらえなおす契機となるかもしれない。

2. イメージは具象的で直接的、集約的である。とくに象徴的体験と象徴的表現が集約的であるところにイメージの特性がある。もしイメージを「行動的な表出」にまでひろげることが可能ならば、たとえば、「逸脱」あるいは「対抗文化」の形成として補促されていた青年の行動なども、失われた自己像の再確保のためのもっとも集約的な象徴空間の形成としてとらえることができるかもしれない。

3. この考えは「ひろく分有される社会像」を仮定し、社会変動の解明に、「社会像の再確保」という予備的な段階を与えることになるかもしれない。

(本学教授)

1978. 12